SNS 利用と友人観の因果関係の探索

○潮村公弘¹・申知元²

(¹フェリス学院大学文学部・²昭和女子大学国際学部)

キーワード: SNS 利用・友人観・パネル調査

Investigations of the casual relationship between SNS use and friendship

Kimihiro Shiomura¹, and Jiwon Shin²

(¹Ferris University, ²Showa Women's University)

Key Words: SNS, Friendship, Panel data

目 的

「若者の友人関係の希薄化」が主張されて久しい。赤坂・坂元(2008)は、友人関係の希薄化を友人と深く関わることを避け、互いに傷つけないように深入りせず、浅い友人関係を築こうとすることであると定義した。

1990年代後半に普及したインターネットは、人々の生活パターン、コミュニケーションのやり方を劇的に変えた。特に、パソコンを利用したソーシャル・ネットワーキングサービス(Social Networking Service; 以下 SNS)は、若者の人間関係をつなげる重要な役割をしている。2010年以後、スマートフォンが普及することで、SNS 利用はさらにしやすくなり、若者の友人関係にも影響を与えるようになった。

初期の SNS は現実の友人との付き合いや選択したコミュニティ内のみでの使用を促進するもので、主に限定された人と繋がっていたが、スマートフォンの普及以後は Twitter、Facebook、Instagram など、不特定多数を対象に情報を流す SNS が使われるようになった。先行研究によると、若者は SNS を通じて新しい人との交流を求めるのではなく、既存の関係の維持・強化を求めている(小寺, 2009)。手紙や対面コミュニケーションからケイタイメール、SNS に手段は変わったが、誰かとつながってほしいことには変わりはない。

本研究の目的は、日本人女子大学生の SNS 利用態度と友人に対する態度の関係性を、パネルデータを用いて明らかにすることである。具体的には、日本で最も広く使われている SNS である、Line と Twitter と友人観の因果関係を交差遅れ効果モデルと同時効果モデルを用いて明らかにする。

方 法

2014年6月・7月(1次調査)と同年11月・12月(2次調査)に横浜市内の女子大学で同一の質問紙を用いて調査を実施した。授業担当者に調査を2回実施することを伝え、質問紙の配布及び回収を依頼した。1次調査に140名、2次調査に165名が参加し、2回の調査両方に参加した84名のデータをパネルデータとして分析に用いた。1年生が78名、2年生が6名で、平均年齢は1次調査が18.4歳(SD=.56)、2次調査が18.9歳(SD=.57)である。

使用尺度は、(1)藤・吉田(2009)によって作成された、ネット利用と現実とのバランスに関する行動を尋ねる項目から没入的関与と依存的関与を使用した。(2)五十嵐・吉田(2003)のケイタイメールの使用認知尺度から、利便性と束縛感・不快感を用いた。(1)と(2)の尺度の「ネット」と「ケイタイ」の代わりに「LINE」と「Twitter」を用いて調査を実施した。(3)岡田(1999)の友人関係尺度を用い、自己閉鎖、軽躁の関係、侵入回避、傷つけられ回避を測定した。その他に属性変数などが含まれている。

結 果

交差遅れ効果モデルによる分析の結果、LINE 利用に束縛を感じる人ほど友人関係において傷つけられないように回避し、

友人から傷つけられないように回避する人ほど Line 利用に束縛感を感じるようになることが明らかになった。Twitter においては利便性を感じる人は友人関係において楽しく円滑な友人関係を求めるようになることが確認された。

LINE(束縛感)→友人観(傷つけられ回避): $\beta = .252, p < .05$

友人観(傷つけられ回避)→LINE(束縛感): $\beta = .244, p < .05$

Twitter(便利)→友人観(軽躁の関係): $\beta = .187, p < .05$

同時効果モデルによる分析では、LINE 利用に束縛を感じる人ほど自己閉鎖の程度が低いことなどが認められた。一方、友人関係を楽しく円滑に過ごせると思う人ほど Twitter 利用に束縛感を感じないことが示された。

LINE(束縛感)→友人観(自己閉鎖): $\beta = -.321, p < .05$

LINE(束縛感)→友人観(傷つけられ回避): $\beta = .696, p < .05$

友人観(傷つけられ回避)→LINE(束縛感): $\beta = .447, p < .05$

友人観(軽躁の関係)→Twitter(束縛感): $\beta = -.235, p < .05$

考 察

使用する SNS によって友人観との関係が異なることから、SNS の特性が反映されていることが示された。LINE は、特定の相手とのやり取りが前提であり、実際の付き合いも伴われることが多い。言い変えると、LINE は日常生活の延長であり、円満なコミュニケーションのためには回避できない SNS であると考えられる。

一方で、Twitter は不特定多数との関係性が想定され、ネット上の付き合いに留まることが多い。交差遅れ効果モデルと同時効果モデルの結果を総合すると、Twitter が便利だと思ふ利用者は、気さくな人間関係を求め、Twitter 使用において束縛感も感じないことが考えられる。このことから、Twitter を便利だと思ふ人は、自分のことを知らせることに違和感がなく、積極的にネット上の人間関係を構築するが、Twitter を便利だと思わない人ほど、情報収集や現実の友人関係の延長として閉鎖的に利用している可能性が考えられる。